

第 3 回：音楽家のキャリア選択を考える

音楽学者 久保田慶一

1．自由と自己責任

キャリアの定義を知ること、キャリア理論を使って自分の人生を自己分析してみることも大切である。しかしそれでどうなるのか。自分の将来はよくなるのか、思ったような人生を歩めるのか。そうなれば、キャリア教育に熱心に取り組めるかもしれないし、キャリア・デザインを学ぶ意味もあるかもしれない。しかしキャリアの意味やキャリア理論を知っても、人生は変わらないということも、一面では真実であろう。ただ人生を歩むうえで、ひとりひとりが絶対に逃れられないことがある。それは自分の人生は「自分で」決めなくてはならない、あるいは決められるということである。このように個人の意思と自由が尊重されるのが、自由主義である。

こうした自由主義から「自己責任」という考えが出てくる¹⁾。自由の代償として責任が伴うという考えである。これは一見すると、至極当然の話であって、自由に選択した結果の責任を選択した人が取るのは当たり前である。しかし問題はある。すべての人が自由に選択できるというのが「建前」となっているが、現実的にはその人の責任ではない理由から自由ではない状況に置かれている場合もあるからである。

例えば、すべての人は自由に大学を選ぶことができる。もちろん学力試験があるから、学力がある人でないと入学できない。受験競争に打ち勝つために、塾に通わなくてはならないとなる。そうになると、家庭の経済力によって、塾に通える人とできない人が出てくる。塾どころか、義務教育で必要な給食費や教材費が支払うことのできない、あるいは支払わない親もいる。

そのような状況にある子どもに対して、大学に進学するかしないかは自由であり、大学に行けないのは学力が足りないからだ、勉強をしていないからだ、はたして言えるのだろうか。こうした状況が数十年すると、経済力の差が学歴の差を生じ、その差が世代間で固定化されると、格差となっている。将来への希望そのものにも、夢を描ける人とそうでない人の格差が生じており、その格差は日本のみならず、世界中で今なお広がりがつつある。

2．合理的な意思決定の難しさ

このように格差が拡大し、自分が将来、どちらの層に属するのか、あるいは今はよくても、この先どうなるのかわからないというのが、多くの人の実感ではないだろうか。今から 5 年前に現在の状況が予想できわけだ。将来を見通すことが難しくなった現代社会であっても、自分の意思でもの

ごとを決定して、決定の責任をとることという前提は変わっていない。そうなれば、できる限り、将来がよくなるような意思決定をすることが、求められるであろう。後悔しない意思決定と言えるのかもしれない。

将来の結果がわからない段階で、この決定は間違っていない、あるいは悪い結果が出ても後悔しない、しないまでも、少しは軽減できる意思決定であれば、おそらくそれは「合理的」と言えるであろう。誰もが納得できる論理で構成された意思決定であるなら、たとえ結果が悪くても、諦めもつくかもしれない。なぜなら、意思決定した時点での「最適の決定」をしたのだと、主張できるからである。

しかし人は合理的に決定できるであろうか²⁾。人間の脳の働きには、一般的に、2種類あると考えられている。ひとつは感情に任せて、直感的に判断を行う働きで、もうひとつは、計算や論理的な推論を行う働きである。そして日常的な意思決定では、後者を活用して論理的に考えると、時間もコストもかかることから、無意識的に前者の働きに頼ってしまうというのだ。前述した例でも、最終的に決断を促しのも、「日当たりが比較的よければ、家賃が安い方がいい」という、論理的な判断ではなく、我慢できるかどうかという感情であった。

このように脳が楽をして、経験から物事を判断してしまうことを、「ヒューリスティック」という。近道による意思決定である。

3．音楽家のキャリア選択とバイアス

ヒューリスティックに基づく判断が、その人のキャリアの選択肢を狭めたり、方向性を歪めたりしてしまうことがあるので、要注意である。このような場合には、ヒューリスティックは「認知バイアス」として働いていると言われる。「バイアス」とは本来は、まっすぐ進行している球に横から力を加えて、進路を斜めにしてしまうとき、その球に働く力のことを言う。

Aさんは大学の学部で学んだあとに、さらに大学院に進学して、勉強を続けるかどうかを迷っているでしょう。この場合、Aさんに大学院で学ぶ目的が明確であるならば、大学院に進学すべきである。しかし音楽の勉強を続けるのか、それとも一般就職するのかという決断ができずに、大学院に進学してしまうと、それはただ意思決定を先送りにしたにすぎない³⁾。

では、どのような要因が意思決定を難しくしたのであるだろうか。いくつか想像できる理由がある。例えば、一般就職してしまうと、音楽大学に入学するまでの、あるいは入学してからの音楽学習に費やしたお金、時間、エネルギーが無駄になってしまうのではないだろうか(埋没コスト)、あるいは、親や親戚の人から音楽家になれなくて挫折したのではないか思われなければならないだろうか(印象管理)、両親は今も音楽大学に進学したことを喜んでいて、応援している(知覚のバイアス)、ここで音楽の道を断念すると友人のBさんに負けてしまうのではないか(競走的非合理)などである。

これらはいずれも「コミットメントのエスカレーション」と言える。一度決めたこと、つまりコミットしたことを継続して、エスカレートさせているのである。では、どのようにすれば、バイアスを取り除いて、より適切な意思決定ができるであろうか。

先生や両親に相談してみるのもいいかもしれない。ここまで音楽の道をめざしてきたが、これ以上続けることが苦痛になったことを、正直に告白してみてもどうだろうか？しかしこの場合、注意が必要なのは、先生や両親も同じようなバイアスに強い影響を受けていないかどうかを、確かめておく必要がある。もしそうだと、「もっと頑張るべきだ」、「どれだけあなたにお金を使ってきた

と思うの」というような言葉を、返されるかもしれない。その場合は、あなた自身が両親のバイアスを取り除いてあげるべく、根気よく話をしなくてはならないだろう。

4. 意思決定の難しさ

意思決定の難しさのひとつは、多くの場合原則として、複数の選択肢から「ひとつ」しか選べないことだ。これを「トレードオフ」という。これはさまざまな意思決定において我々が直面する課題である。こうした課題を解決するうえで役に立つ考え方が、「オポチュニティコスト opportunity cost」、日本語では「機会費用」である。例えばAとBの選択肢を選ぶ場合、本来ならAを選んでおけば最大の便益を享受できるのに、何らかの理由 あるいはバイアス からBを選んでしまった場合、Aの便益とBの便益の差を、機会費用という。つまり、Aを選んでおけば便益が最大になったはずなので、最終的にBを選んだことによる機会費用はマイナスとなり、「損失」となるわけである。もっともこれは実際に生じた損失ではなく、あくまでも、架空の損失であることに注意が必要である。

このことが教えてくれることは、いずれかを選択する際には、それ以外の選択肢を選んだときに、どのような状況になっているのか、自分が満足しているのか、それとも後悔しているかどうかを、想像できるかどうか、重要な鍵だということだろう。

例えば、Aを選んだとき、Aの条件のひとつが満足できなくて、きっとBの方がよかったと思うかもしれないと、予想ができるのであれば、Bを選んでおくべきかもしれない。しかし人は一度決断したのに対しては、それが正しかったことを示す情報を好んだり（確証バイアス）、自分の判断を過度に信頼したり（自信過剰）、あるいは、別の選択肢があったことすらも忘れてしまう（後知恵バイアス）という、数々のバイアスが報告されているので、それほど心配することもないかもしれない。

ものごとを決断することは難しい。そのために、多くの情報を集め、自分のことをよく知っている親族や先生、そして自分より一歩先を進んでいる先輩の意見を求めてみる必要があるのである。いずれにしても、最終的には自分自身で決めて、自分自身で責任をとるという覚悟があれば、意思決定を恐れる必要はない。むしろ、結果に対して、自分自身で責任をとれるかどうか、またその結果が自分の努力の結果であるのか、そうでないのかを、自分で見極めることができるかどうかである。これができれば、将来の成功はより確実になるであろう。

5. 人生は偶然か必然か

ここでは、人生を決めるのは偶然であるという見方について多くを考察していない。例えば、何かが偶然に生じることを想定して、キャリアをデザインしておくことを推奨する、クランボルトの「計画的偶発性理論」がある⁴⁾。今、偶然に起こったかのように思えることも、もはや変えることのできない過去の結果であって、その因果関係がわからないから偶発的に見えるだけである。だから偶然を積極的に受け入れることが大切だというのである。こうなると、偶然も必然、必然も偶然となり、どうこう考えてもしかたないことになる。

人にとってどちらが楽な生き方だろうか。これは簡単には答えはでないだろう。仏教でも「因果

応報（いんがおうほう）」とって偶然に生じるものはないと説く一方で、「諸行無常（しよぎょうむじょう）」とって、永遠に存続するものはなく、今あるのは偶然にすぎないと言われる。だからとって、勝手気ままに生きていいというわけではない。このような生き方がまた不安をもたらすこともある。

人の人生（キャリア）が変化（発達）し、その影響要因として最も大きい環境の変化も、それにもまして変化していく。そうすると、自分の人生の将来を想像したり、設計したり、計画したりすることが、難しくなることは明らかである。そのためには、生涯学習を通して自らのキャリアを理論的に考えてみる必要もますます必要になってきている。

21 世紀に入ってますますキャリア教育の必要性が叫ばれるのは当然であろう。現代の日本の学校教育で行われている、職業理解に焦点をあてたキャリア教育ではなく、自分のキャリア、あるいは人としての生きるというキャリアを広く学ぶことができる教育が必要である。それは学校教育だけでなく、大人になってからも必要なのである。これこそ、人生 100 年時代に求められることなのである。

6 . 最後に

今回を含めた 3 回の論考を発表したが、これら論考のより詳しいヴァージョンが 2019 年 9 月末に刊行される筆者の『新・音楽とキャリア』（スタイルノート）に収められている。今後、この連載ではこの新刊書に含まれた文章の要約版が掲載されることになる。この連載はあと数年は継続するので、ここでの連載では新しい話題や筆者の関心が紹介されるであろう。

註)

1) 自己責任論の問題を論じた本は多数あるが、最近では、西きょうじ 『さよなら自己責任』（新潮新書、2018 年）がある。

2) 合理性のこのような限界を、行動経済学では、「限定合理性」という。人はすべてのものを比較することができないことから、必然的に、合理性には限界を伴う。ある男性が「最良」の伴侶を見つけるには、世界中の女性とおつきあいしないといけない。これはどだい不可能で、多くの場合は、出会いの縁や偶然を大切に、満足化を図るのである。なんと主観的なことだろうか。だからこそ、人は幸せになれるのである。

3) 音楽大学卒業生のキャリア問題については、拙著『2018 年問題とこれからの音楽教育』（ヤマハミュージックメディア、2017 年）で詳しく論じた。

4) J.D. クランボルツ/A.S. レヴィン 『その幸運は偶然ではないんです！』（ダイヤモンド社、花田光世・大木紀子・宮地夕紀子・訳、2005 年）